

照明探偵団

発行日：1999年12月20日 発行人：園出眞 編集：田中裕美子  
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内（藤西玲子・田中裕美子）  
TEL：03-5469-1022 FAX：03-5469-1023 e-mail：tanteida@pp.bekkoame.ne.jp http://www.bekkoame.ne.jp/~tanteidan/

# 照明探偵団通信

vol.06 SHOMEI TANTEIDAN TSU-SHIN

海外照明探偵団レポート

クアラルンプール

北京

照明探偵団倶楽部活動

照明探偵団倶楽部活動

面出の探偵日記

団員からの照明情報

街中のライトアップ 10選 寄稿

照明探偵団日記

研究会サロン（渋谷 照明探偵団事務局）報告

研究会サロン（渋谷 照明探偵団事務局）報告

研究会サロン（渋谷 照明探偵団事務局）報告

研究会サロン（渋谷 照明探偵団事務局）報告

研究会サロン（渋谷 照明探偵団事務局）報告

研究会サロン（渋谷 照明探偵団事務局）報告



クアラルンプール  
北京

# 海外照明探偵団



## クアラルンプール

'99.7.7 ~ 12

そろそろ日本も暑くなりかけた7月はじめに、赤道間近のマレーシアで都市照明調査を行った。マレーシアの首都クアラルンプールは、様々な文化、宗教が入り交じった都市であり、現在では日本と韓国の共同で建てられたペトロナスタワーなどの照明調査には好都合な建物が街の中心部にある。今回は、植民地時代からの古い家並みが続き、その間の細い路地を賑やかな屋台が埋め尽くす「チャイナタウン」、地上450mの世界一高いペトロナスタワーがあるクアラルンプールの新しい中心地「ゴールドトライアングル地区」を中心に調査を行った。

チャイナタウンのなかでも最も賑やかな「ブタリン通り」JURAN PETALING (JURANは通りの意味)は、300m程の長さで、幅員15mの通りである。通りの規模としては小さいものであるが、夜になると通りの表情が一変する。昼間はゴールドトライアングルに向かう車で渋滞している車道も、日没近くになるとどこからともなく大量の荷物をつんだワゴンが現れ、その荷物を下ろしながらあつ

という間にお店を作り上げ、日没間近の頃には奥が見えなくなるほどの出店が立ち並んでしまう。昼間は歩くのもつらい暑さが夕方頃には散歩にはちょうど良い涼しさになり、人出も多くなる。少々気合いを入れて、背中が擦れ合うほどの人混みの中に入っていくと、昼間かと思うほどの明るさの中で、Tシャツやら、お菓子、バツタものの時計やら何やら怪しいものばかり売っていて、周囲の熱気と人混みのなかで異様な活気を帯びている。

光をよく観察してみると、この通り用の車道照明や信号機などの公共設備があるにも関わらず、それらは出店のテントで隠されてしまい全く機能していない。通りの両サイドには3つ星程度のホテルやシーフードレストランがあったりするが、気をつけていないと入り口にも気が付かないような状態である。はじめに人混みの中に入り、三脚を立て撮影をしたり、照度計で地面をはいくつばって照度を計っていたりすると、徐々に周囲の目が「こいつは、一体何をしにここへ来たんだらう？」といったような表情でこちらを見つめている。その痛い視線の中から数名の好奇心旺盛の若者が近寄ってきて「なにしてんだ？」という感じで語りかけてきた。その時、「集団で装うつも

りかもしれない」という危険な雰囲気を感じていたため、僕は毅然とした態度で詳細を説明したら、何と親切にも撮影するには絶好な通り沿いのホテルを教えてくれた。そのホテルの最上階の客室に入れてもらい、その部屋の窓をバナーと開けると、通りには出店がびっしりと張り付いて光が川ようになっており、まさに「光のカーペット」であった。

現地の人にたずねてみると、ここに出店を出す人は決まっているらしく、自分たちの店が使用する電源は通りの両サイドにある出店用の分電盤から電源を引き込んでいることが解った。一見雑然としているが、実は以外にしっかり管理されている。出店で使用している照明はいたってシンプルなむき出しの直管型や電球型の蛍光灯が主体である。日本のお祭りなどでみる出店は白熱電球の暖かい光で何か暖かみのある印象があるが、こちらは、効率重視の蛍光灯が多い。照明器具の位置も丁度目線に近いところがあるので、売っているものがキラキラと見える。とにかく輝度を発するものが多いのである。これが「売るためには容赦なく明るくするぞ」と言わんばかりの売り手側の気合いを強く感じさせる。実際に照度を計ってみると道路面(道路面)で



左: 公園の水中照明



右: 細いホテルの入口



600ルクス、手元あたりの高さでは、1000ルクスから1600ルクスという明るさで、周囲が比較的暗いこともあり、よりの明るさが強調されている。日本でも秋葉原の電気街などの店先ではこのくらいの明るさがあったりするが、これらに共通した「商売繁盛＝暴力的な光の強さ」のような光の構成は、ヨーロッパのように洗練はされていないもののアジアならではのパワーを感じる。

チャイナタウンとは対照的に、近代的な高層ビルやショッピングセンターなどが立ち並ぶゴールドライアングルで、まず最初に訪れたのが地上410mという東南アジア一番の高さを誇るKLタワーである。照明探偵の鉄則である「知らない町に来たときは、そこで一番高い所から観察せよ」というわけである。

展望台から見た町の様子は香港やニューヨークのような華やかなものでないが、その中でひととき目立っているの

が、メタルハライドランプの白い光が外装のアルミ色を輝かせている、地上450mという世界一の高さを誇るペトロナスタワー（表紙写真）だ。日没間近のブルーモメントの空をバックに白く浮かび上がるその勇姿は象徴的にそびえ立ち、クアラルンプールを見渡している。

主要な幹線道路は曲がりくねっていて、そのオレンジ色の光は一目で高圧ナトリウムランプだと解る。赤道間近の南国の暑さを助長するようなオレンジの光の合間に、黒く沈んだ部分が住居や小さな商店などが密集するエリアで、その中の強い光がたまっている場所が屋台街である。ペトロナスタワーの前を通る「アンパン通り」JURAN AMPANGは、東西に5km程延びた片道4車線の主要幹線道路で、ペトロナスタワーの対面には通りと同じ高圧ナトリウムランプでライトアップされた「Malaysia Public Bank」がある。道路照明には、高さ15mのポール灯が35mピッチに千鳥配置されている。ポール部分はいたってシンプルな八角形の断面形状をしている鋼管材を用いたもので、ポール上部に賑やかなチカチカランプが付いているものもある。ランプは高圧ナトリウムランプ250Wで、交差点の横断歩道面では100ルクス～160ルクス程の明るさだ。この明るさとしては日本の銀座の数寄屋橋交差点よりはやや明るいぐらいであるが、周囲の建物のライトアップの明るさもあり、視覚的には明るく感じる。この様な大通りに必ずあったのが、高さ3.2m程の回転式の広告塔で、これは夜間光るのであるが、ヨーロッパなどに見られるものにも似ていて、おそらくイギリス植民地時代のなごりであろう。またその他に設置されて間もない高さ3.5mのデコラティブな



舗物の歩道用ポール灯があったが、この日にはまだ電源が通っていなかったらしく点灯はしていなかった。ペトロナスタワーの下にはショッピングセンターKLC、屋外ガーデン、公共プールのようなものもある）があり、そこで昼間は子供たちが水遊びをしている。ショッピングセンター内は、有名ブランドのブティックや日本の伊勢丹などが入っているが、最近のマレーシアの経済状況を反映してか、テナント募集の空きスペースが目立つ。屋外ガーデンは閉園するPM10:00まで家族連れやカップルで賑わっている。噴水の照明や木々のアップライトなど昼間の暑さを忘れさせるような光が暗めながらも意外に心地よい場所を感じさせている。ここでは、人々がそれぞれ夜の時間を楽しんですごしている。日本の公園というカテゴリーばかりで、何やら暗く、トイレや池の回りに気の利かないポール灯の青白い光がこうこうと付いているだけだったりするが、この屋外ガーデンのように健康的な広い空間が都市の中心に位置しているのは素晴らしいことである。

クアラルンプールの都市照明では、手法にとらわれない、様々な光がこの国の人々の生活の中に溶け込み独特な光環境をつくっていた。これはこの国が歴史上、イギリスの植民地であったことやそれ以前の王室時代の名残もあるのかもしれないが、それ以外に最も強く感じるのが混沌とした光がありながら、強く人々の生活や気候・風土に合致したもの（無駄のないもの）であり、その中で自分のライフスタイルや必要性に合わせて変化させていく器用なアジア人の一面を見たことであった。やはりその国ならではの光があつてしかるべきであるし、そう考えてみると私たちが住んでいる日本の自動販売機の光やコンビニ、繁華街のネオンサインなども、現代日本人の生活の一片を映し出していると言える。日本もクアラルンプールも気候・風土は異なるものの、まだまだ不思議な光が多く存在するアジアのカオスの一員なのであろう。

（田中 謙太郎）



左 出店のあかり。まるで光のカーペット

## 北京

'98.11.27 ~ 12.4



郊外の北京首都空港で8月初旬の北京に降り立つ。最新型の旅客機B777の乾燥した機内からクラブに出たとたん、日本の梅雨時のような湿気が体にまとわりつく。どんよりとしているわけではないが、空はどこまでも一様に雲に覆われ、白いドームの中にいるようだ。これが北京の盛夏である。

### ■北京の夜景

北京のヘソ、天安門から西へ10km程のところにある「中央公播電視塔」、通称北京タワーは400m近い高さに展望室がある。都市照明調査の鉄則を守り、まずは夜景を鳥瞰できるこのタワーを訪れたが、視界はゼロに近い。この季節、大気に充満する水蒸気に阻まれタワーの足下も見えない状況だ。都市照明調査の難しさはこんなところにも潜んでいる。夏季の方がヒトとマチのアクティビティは高い。しかし、展望台からの眺望にとってよんだ大気は好ましくない。

代わりに、故宮博物院を挟み天安門の北

に位置する景山公園の人工山から町並みを見渡すことにした。ここ景山公園は、かつて北京の貴族・官僚の住んだ内城のほぼ中心に位置している。旧内城は保存されている歴史的建造物が多い。また「四合院造り」と呼ばれる伝統的民家もまだ多く、中庭を中心としたつくりのため、暮らしの明かりが鳥瞰する夜景のなかに見えてこない。その暗く沈むいにしへの町並みのなかに西単、王府井、東西の長安街など、再開発の急進する地区に林立する高層ビルが、内城エリアを縁取るように輝いている。閉鎖している故宮博物院の暗闇を背景に長安街、天安門広場の光が空を煌々と白く染めている。その他方角の景色はただ茫洋として青黒くかすむのみ。この陰と陽が北京を代表する夜の光である。

### ■ライトアップ

夜景の主人公はビルのライトアップである。百貨店、ホテル、高級レストランなどほとんどの商業施設がライトアップされ、夜に賑わいを与えている。この国のライト

アップ好きは噂には聞いていたがここまで徹底しているとは思っていなかった。

町中をつぶさに見て歩くとライトアップのための投光器がいたるところにある。隣接する歩道にたくさんの投光器を載せたポールを建てていることが多い。なかには容易に手で触れることが出来る高さところに高熱を発生する400Wクラスのものが付いていることもあった。またカラーライティングが多いのも特徴である。

投光器は公共的な施設にもほとんど設備されている。ただしそれらは普段点灯されることはなく、建国記念日など、何かのイベントの時のみということらしい。また、再開発地域に林立しつつあるビルを含めメインストリート沿いの建物は今年10月1日の建国50周年にむけてすべてライトアップせよとのお達しが政府筋から発せられていると聞いた。自由化が進みつつあるとはいえ、中央政府のコントロール下にあるため、商業施設のライトアップも国威象徴の一部を担っているのだ。



左 オープンしたての新天安市場の前はヨーロッパ製のポール灯や光ファイバーを使った噴水照明など新しい景色をつくる光が仕込まれていた。

下 申し新なさそうに設置されている歩道橋横スポット





左 車道照明の何百倍もの光がライトアップに使われている

上 天安門前

### ■大音量と大光量の広場

かの天安門広場は、昼夜ともに北京中、最も賑わっている場所である。50 m間隔で高さ約10 mのシステムポールが、2列間隔(100 m)設置されている。装飾的要素のガラスグローブ8つ、ライトアップ用スポット、照度を確保する為のフラッドライトの3つの機能が無造作に集約されている。また、巨大なスピーカーが2基取り付けられており、大音量で国の唱歌のようなものを流し続けており、その音は広大な故宮を隔てた景山公園でも聞こえる。

建国記念日の式典時にはさらにスポット、フラッドライトも点灯され、広場を取り囲む天安門、人民大会堂、革命博物館などもライトアップされる。面積40万、50万人を収容して真昼のように明るい広場になるのだ。この世界一の広場は、おそらく世界一明るい広場でもある。

天安門前を横切る形で北京の中心を東西に貫くメインストリートは、天安門の左右で西長安街、東長安街というが、ほぼ2

ブロックごとにその名称を変え、総称を持たない。しかしその照明手法は東西約10にわたって一貫している。天安門広場とほぼ同じ多機能ポールが車道の両側に並んでいるのだ。ガラスグローブの装飾灯と車道側のみ配置されたフラッドライトが点灯している。交通照明に必要なグレアカットという概念は少しも見あたらない。やはり上部の支柱内部にスポットライトが隠されており、式典パレードの時など点灯されるのだろう。定かではないが、一説によるとこの道路は有事の際の滑走路となることが想定されているという。この車道は幅員が60 mもあるが、中央分離帯がステンチールの簡単な柵が延々と並べられているだけである。たくさんのグローブは上空からのインジェクションとなり、路面の高照度は目視による着陸には十分である。たしかに景観への配慮とか安全かつ合理的な車道照明とはとらえ難く、式典と有事のための街路照明で有ると考えた方が納得がいく。

### ■都市の国際化

自由化が進みつつある経済状況を反映し、再開発と建国五十周年に向けた都市整備に加速される形で中国の都市は急速に変貌しつつある。対外的な開放政策の先兵である上海ほどではないが、注意深く国際化しているように見えるこの北京もやがてそのようになっていくに違いない。

整備中の街路にヨーロッパ製の外灯もたくさん見た。北京銀座といわれる王府井では、調査時まさに再開発の工事大詰めといった感じで、設置されたドイツ製の外灯や、路面に埋め込まれた内照式看板のような蛍光灯器具、噴水広場の水中照明など、まだ灯は入っていなかったが北京では目新しい西欧型の夜景となることが予想された。資本とともに価値観や嗜好も確実に流入してきているはずだ。それが今後どのように溶け合い、中国らしさを残していくのか興味深い。夜景や照明にはそれが如実に現れるからだ。

(澤田 隆一)

右 投光器によって照らし出された長安街  
下 調査中のスケッチ

